甲板に立つて海岸を見て居ると、何處からともなく一隻の小蒸汽が黑煙を立て速力をはやめて、棧橋の近くにつないであつたジャンクの傍らに碇泊した、中から支那人が二人首を出して近所の樣子を窺ふ、如何にもその素振りが怪しいので、何をするかと見て居るとやがて一人がジャンクを渡つて上陸し、海岸に積んで有つた材木を取つては小蒸汽の支那人に渡す、彼は受取つては手早く胴の間に押し込む、手當り次第近所に散亂して居る品物をかすめて、再び二人は小蒸汽の胴の間に姿を隱くし、黑煙りを立て、何處ともなく消え失せた、僕は初めて支那人のコソ〳〵海賊を見たが、實にづう〳〵しい敏活なものである、全く活動寫眞其まゝの光景手に汗をにぎつて見物した、之が活動なら差詰め僕が一人の立役者となつて、彼等の後を追ひ掛け、一大活劇を演ずる場面が展開せられるのであるが、惜しい處で尻切蜻蛉に一卷の終りを告げて了つた。

支那人は盜癖の强い民族であると聞いたが、今日計らずも其眞相の一部を見た、惘むべき亡國の民、悲しむべし老大國の末路、兎角して我が船は錨を揚げ、愈々之が最後の寄港地

として、日本に一歩〳〵近付く、思へば五十餘日の永き海上生活、世界はさのみ廣からずと雖も、さのみ狹くもなし……などゝ、買込んだ籐の長椅子に横たはつて、甲板でうつらうつらと考へる。

按ずるに我が地球は、太陽に屬する一小恒星にしてその距離太陽をへだつる正に三千六百萬里、然も天に輝やく幾億萬の星は、粒々皆太陽ならざるはない、その遠きは光を放つて地球に達し、我等の眼に映ずる迄幾萬年を費やすものがある、其本體は既に幾萬年の以前に消滅して、光のみが我等の眼に映じて居るのもある、亦數萬年の以前に既に形を成して、未だ其光りの到達せざるものもある、數に限りなく距離に限りなくその生滅の時だに知らぬ、茫然として此大宇宙を想像すれば、人事の紛々たる煩悶煩惱馬鹿臭さく、自己の小さくして無力なるを嘆ずるのみ。

我等のいふ天の川は、無數の恒星の集まりにして、其外圍にも亦スペッキと稱する白き斑痕の見ゆるは、之亦粒々群星の重なり〳〵て白き光を發するものと聞く、愚へば我等の

地球が、此大宇宙に存在する有様は、大海に浮べる粟粒の一粒、其粟の三分の一が陸にして、三分の二が水。

一昨年この粟粒の一角を船出して、シヤトルに上陸し、セントルイスより紐育に至り、止まる事約一ヶ年、更に大西洋を横断して英國に渡り佛蘭西に移る、此間正に一年有半、身に餘る幾多の艱難を經て、再び今故國に歸る。

嗚呼小さき者よ、汝の名は人間なるかな、

馬鹿〳〵しなんと云ふ計りなし、

とは云ふものゝ、物を喰はねば腹はへる、火傷をすれば確かにあつい、病氣になれば藥ものむ、阿波の鳴門をきけば涙が出る、命を捨てるは感心せず、ウーム……、喜怒哀樂に超然たるは亦難いかなである、いや難いかな處の騒ぎではない、憫むべし汝は、喜怒哀樂に終始せる動物ではないか、萬物の靈長がきいてあきれる、處で又考一考して見る……。

小さき者よ汝の名は正に人間であるに相違ないが、悲觀する勿れ、まだ小さい物がある、

一滴の水中に幾億の細菌が生息する、今日の顯微鏡が更に一層進歩すれば、其細菌中に更に寄生虫を發見するかも知れない、いやそれ處ぢやない、天下の森羅萬象は皆分子の集合にして、其分子は亦原子の集團であり、其又原子は電子の集合物であると云ふ、試みにその電子の大きさは、一體どの位の物かと聞いて見たら、何とか云ふ學者が說明して曰く、巾と奥行きが各三十米突で、高さが十何米突とやらの建築物を、假りに分子の大きさとしたら、筆の先きで一點を打つた位なものが、電子の大きさであるといふ、いやえらい細かい物で、其形を想像するだも煩はしい。

要するに大は宇宙の大觀にして、其大きさは人智の想像に及ばず、小は電子の微にして、これ亦其窮極する處を知らぬ、つら〳〵惟るに人間といふ代物は、兩極端を知らず、中ブラリンに生きたり死んだり、悲しんだり笑つたりして居る動物に過ぎない、餘り偉らさうな事は云ひつこ無しにしやうぜ、オヤ、夕飯の鐘が鳴る、どりや人間並にパク付いて來やうか。

故國

香港を乘り出して一週間の後、船は太平洋に出て進路を左に廻轉し、四國と本州の間に這入つて來る、瀬戸内海は景色がよい、彼れが六連島で之れが岸柳島、點々として海中に散在する島々は盆石の如く、松の綠りは夕日に映じて滴るばかり、實に天工の美を極めて居る、何と云つても日本は世界の公園と言ひ得る。

格別僕を待つ人があるでもなし、逢ふたら嬉しからうと思ふ程の人もなし、何れ東京へ行つたら大使館の一件で、散々苦勞する事であらうとは思つて居るが、人間といふ奴は我が身ながら實に變挺な動物である。

何となく氣がそわ〳〵して落付かない、他の人はと見れば、これも又五十面さげた分別盛りの親爺が、矢張そわ〳〵して鞄の鍵を掛けて見たり外したり、時計を見たり船室を出て見たり腰掛けたり、卷煙草の火の付いた方を、口に突き込んで眼を白黑させてペッペッハッハ！ラッチもない事で御座るわい。

大きな貨物は船に託して横濱へ、自分は小さな鞄を兩手に下げて神戸に上陸し、汽車で一直線に横濱へ、家兄の新ホームへ一泊して、新嫁君に逢つたり、其親戚に近付きになつたり、翌日はブラリと新橋に到着、手荷物と相乘りでヨタ〳〵店へ歸つて來た。

見れば格別進歩した處もない、笠原君が營業部長で、問ふて曰く、君久し振に店に歸つて、大分變つて見えるだらう、感想はどうかね？

左樣、前途遼遠ですな！

昨夜は僕が歸るだらうとあつて、わざ〳〵新橋へ迎へて呉れた友人もあつたとやら、野人禮に倣はず、行けと云へばフラ〳〵と飛び出し、戻る時も又同樣、僕の如きを人間並に扱ふ方が間違つて居る、一寸向ふ河岸へ小便しに行くからとて大勢に送られて、プラットホームに一大隊も並んで、萬歳！なぞをあびせられたら、人の事でも顏から火が出る。

思へば物騷な面だ、これで四角ならマッチだ、ウフッ！。

設計と製作

リバープールで別れた日比さんは、百貨店研究をしながら米國を廻つて、僕より遲るゝ事二ケ月にして歸朝する、其中にロンドンで買入れた、オークやマホガニーを初めとし、其他種々の材料や參考となるべき椅子、卓子、ストーブ前飾りなど續々到着して、三井銀行前の廣場へ山と積んだ、そこで愈々巴里大使館裝飾に對する正式の役割任命となつて、差詰め僕が設計係り、T君が製作係り、横河博士を顧問として、久保田米齋君を囑託とし、駿河町の三友倶樂部の下を事務所に借用して、愈々製圖板を据ゑ付け、定木を執つて本設計にかゝつたのは明治三十九年の暮であつた。

意匠室から參考書を借りて來るやら、博物館へ研究に行くやら、朝早く出勤して夕方眞暗になる迄、蒲鉾の樣に板にはり付いて、專念有らん限りの智惠を絞つて居る。

T君は一脚の机を置いて材料の始末をしたり、家具製作の交渉をしたり、金物は誰に注文して塗物は誰れに賴む、家具の製作は清水米吉君が、福吉町に工場を開いて專ら三井家の仕事をして居る、此人は嘗て獨逸に留學して相當の經驗を有して居るから同君に依賴する

と、何せよ呉服屋の番頭が家具の製作を研究する、なか〳〵以て容易の業でない、僕の設計も段々進んで愈々現寸製作となり、助手を要する處から横河氏の世話で森垣君を賴んだ、同君は美術學校の卒業生で、今は地方の中等學校に圖案の先生をして居る、僕の爲めには助手兼先生の積りて賴んで見ると、中々さうは問屋で卸さない、助手は矢張り助手で先生には不充分であつた。

壁張窓掛等は織物を、新たに織立てしむる必要がある、これは京都から栗本月嘯君を招いて、同君及助手と三人、米齋君には增山君を助手に賴んで、愈々手揃ひとなり着々製作の順序が立ち、果てはボツ〳〵製品も出來上がる。

これ迄の艱難辛苦は一と通りの事でないが、漸く今日に至つて面白味と樂しみが加はつて、前途一道の光明を認め、下宿樓上夢漸く圓かに結ぶ日もあつた。

月給

明治三十七年日本を出發する時月給金二十六圓也の僕は、外國に居る間は實費を給與せられて、生活には困らなかつたが、歸朝して仕事にかゝつて見ると、依然として廿六圓の給料である爲め、かなり困難な日を過ごした。

西洋に居る間は、毎日西洋料理で相當の滋養分を執つて居たものが、歸朝すると同時に十錢か十五錢の辨當で、肉などめつたに口へは這入らない、先づ下宿は親戚の二階六疊一と間を借りて、苦學の妹と同居し、妹に飯を焚かして僅かに餘裕を作る、朝も表神保町からテク〳〵と電車賃を始末する、此安月給の苦しい生活で、三越の榮辱に關する大任を負ふ、勘定に於て引合うものでない、學校出の青年なら不平禁ずべからずして、早速御免を蒙るであらうが、幸ひにして僕は困苦窮迫に馴れて居る、當時僕の胸中唯一片の義務を思ふて、月給など鼻糞程にも考へて居らぬ、唯此仕事に成功せよかしの一念、追想すれば何とはなしに胸迫るものがある。

當時僕の妹は養家の沒落に獨立の考へを起し、東京に出て苦學してゐた、彼女は鄉里の

小學校を出たのみで、格別教育を受けなかつたが、赤十字社に看護婦をして學資を作り、日露戰役にも從軍して、歸朝後は教育者として立つ考へで、堀越裁縫女學校に學び、傍ら獨學素養を積んで、文部省の檢定試驗を受けるといふ、丁度試驗の時は風邪で發熱甚だしきを、頭に氷袋をのせて受驗し見事パスしたなどは、女ながらも健氣なもので、僕の爲には宜い刺戟であつた、兎角して慘憺たる苦心の歲月は流れ、翌年花瀾漫の春を迎ふる頃には、大體仕事の眼鼻も付き、今は工程の仕上げを待つばかりとなつた。

慰勞といふ意味に於て、一週間程の休暇を得た、そして僕は京都、奈良、吉野等の旅行を思ひ立ち、久々でのんびりした旅に出た、但し貧生懷中豐かならず、此點のみは遺憾千萬、それでも汽車は二等を奮發して先づ京都に赴き、松吉に宿を定めて、案内は支店の友人やら車夫などに賴んで未見の名所を見物する、金閣、銀閣、小室、嵐山偖ては諸々の神社佛閣など、世界を廣く見た眼には期待した程の事もない、明日は宇治の平等院でも見て來やうか。

平等院

松吉へ電話を掛けて來たのは、地總の駒ケ井さんである、御迷惑でも一寸八進(はちしん)へ御越しを願ひたい、粗酒一獻差上げたいとある、斷るわけにも行かず、晝飯前に案内の通り出かけた、酒よ肴よと御馳走になつて、程よく切上げる積り、失禮ですが今日宇治の平等院へ參る心算り此邊で御免と立ち上がる、まア〳〵今日は私共に御つき合ひ願ひたい、宇治なら之から御案内申上げると云ふ、知らぬ他郷を案内して呉れる御厚意辱けないと車を連らね、町を越え畑を過ぎてトツトと走る、妙な方向に行くものだと思ひながら、變な門をくぐつて行く、兩側の家は素人家とも付かず料理屋ではなし、何となく艶めかしい空氣が流れてゐる、やがて車は角屋といふ古ぼけた看板の門に止まる、僕は此時ハツと思つた、これは若しや京都で有名な島原といふ遊廓の角屋といふ遊女屋ではあるまいか？

駒ケ井さん、僕は宇治へ行くのですが、これは少々方角が違ひはしませんか。

ハア！、いや此裏にもステーションが有まするで……まゝチヤツト御上りやす、今日は一とつ私共に御つき合ひを……それに此家は太閤時代から今日迄續いてゐます舊家でごわして、座敷は又昔の面影を其まゝに、一寸御參考にもなります サカエ…… エツヘツ〳〵

門前で兎や角云ひ爭つてゐると、先發の伊藤君と粋な丸髷げが出て來て、

さア駒ケ井はんも御客はんも、何をうざ〳〵云ふて居やはります、まチヤツト御上りやす……仕樣事なしに座敷へ通る、燒海苔にうにで酒が出る、餘りすげない事も云はれず、癪にはさわる、澁々二つ三つ過ごして宜い程に切上げやうと、

それでは一とつ御座敷を拜見して、出掛けましやう……、

と立ち上がる、駒ケ井先生先きに立ち、これが昔誰やらの遊んだ部屋で、彼れが何と說明して呉れる、やがて一と間の襖をスラリと開けると、中には流連けの客と敵娼の遊女が、酒汲み交はして何やらイチヤ付いて居る。

僕はハッと思つたが、駒ヶ井さんは存外平氣で、御免やすチヤツト御座敷拜見とすまして這入り込む、見れば客といふのは、分別盛りを通り越した五十格好の商人風、敵娼は紅絞縮緬の長襦袢に、淺黄鹿の子のシゴキ、白粉は斑らに禿げて後れ毛は亂れ、お齒黑付けた四十先きのうば櫻、此取亂した有樣を正視するには忍びない、もし此人に妻子があつて、この有樣を見せたら何と思ふであらうか？。

餘計な事を考へたら、もう一刻も此家に居るのがいやになり、留むるも聞かずそこ〳〵にして外に出る。

宇治へ行くのだ、うしろの停車場へやつてくれ。

後ろの停車場からは、宇治へ行かれやしまへんがな。

宇治行きなら七條やと車屋が云ふ、愈々一パイ喰はされたと思つたが仕方がない、それなら七條へ急いでと命ずる。

春の日は麗らかに照して、心地よい風が頰を撫でる、後ろを見れば駒ヶ井さんと、丸髷

げと十二三の半玉が車で續いて居る、どこ迄僕の自由を束縛する積りか、見當違ひの歡待振りにはほと〳〵閉口させられる。

兎角して宇治へ着いたのは、春の日も既に落ちて誰そ彼れの夕まぐれ、平等院は向ふに見える高い屋根と、指さす方を見たばかり、もう時間も御わへんで、亦重ねて御越しやす、兎も角も夕飯なと……菊屋といふ料理屋へ案内せられ、酒よ肴よと亦歡待、先方も扱ひ惡くい客で有たらうが、此方も厄介千萬な相手であつた、終に平等院見物の目的は、空しくして京都に引返し、翌日は栗本君と約束もあり、吉野を指して出發したのである、御蔭を以て今日尙未だ平等院拜觀の機會を得ない。

後で此話を益さんにすると、先生手を打つて大笑ひ、貴樣を島原へ連れ込んだのは面白い、角屋の玄關先きで、熊谷と敎盛が談判を初めたのは奮つて居る、ヨシ此仇は僕が討つてやると云つて居た。

其後益さんが京都に行つた時、祇園のさる茶屋へ、一流の藝者舞子二三十人を集めてス

ツチヤン騒ぎ、駒ケ井君に電話で直ぐ來て呉れと云つてやる、駒ケ井先生來て見ると此騒ぎ、眼を丸くして居ると、まア駒ケ井はん宜う御出やしたと計り、四方八方から盃の雨、流石剛氣の駒ケ井も、へゞレケのグデン〳〵となつて肘を枕に高鼾き、フト眼を覺ますと、益さんはとうの昔に煙と消え失せて、この勘定は一切駒ケ井はんの負擔となる、先生バクンと口を開いて嘆息之を久うし、あゝ關東には怪體な化け者が居るよ——。

吉　野

今日は栗本君と約束の通り、寫眞機をかついで奈良から吉野へと出發する、旅は道づれと云ふ程あつて一人旅より興味が深い。

奈良では春日神社の燈籠を數へ初めたが途中で閉口し、古代木造建築や千年の大杉を眺め、法隆寺、猿澤の池、二月堂偖ては博物館に、天平の古美術品を賞して、それから吉野へ行く。

吉野驛を出て車を賃し、爪先き上りの山道を吉野川に添ふて進む、車の先きには綱を付けた犬が、先き挽きとなつて車夫を助け、健氣な奮闘振りを見せる、樺太の橇と等しく旅客に一種の感興を與へる、沿道の櫻は大方散り果てゝ、青葉の吉野には山路の曲折に民家の隱見する樣四條派の山水其まゝの景色、又愛すべきものがある、一目千本、中の千本など盛りはさこそと思はれる、雲慶の作とやらいふ仁王門の前の宿屋に投宿、一泊して翌日は如意輪堂を訪ふ。堂守はいと丁寧に二人を案内し、寶物やら有名な正行が殘したといふ屏、矢尻の跡に、

返らじとかねて思へば……

の歌は餘りに鮮やかで、これが矢尻の跡とは思はれず、何れは後世の作と笑はせる。

伊豆のどこやらには賴朝公御七歳の時の髑髏と云ふのがある。

やがて堂守はどうぞ此方へと、座蒲團を二枚敷いてある座敷へ案内して、先づ御一服と抹茶が出る、打物の菓子が出る、大に恐縮して居ると、やがて一冊の芳名錄に硯を添へて、

どうぞ應分の御寄進をと來た、之あるかなと笑はせる、然し向ふは定石を打つて來たのを、此方は如らずに引掛かつたのである、何と致方もなく〳〵金一圓宛の、御高い抹茶を飲んでしまつた。

栗本君は頻りにブツ〳〵云つて居るが、二一天作をはなれて考へれば之も又旅の一興である、思へば先き程の中學生が五六人、頻りに何やら質問して居るのに一向返事もせず、問もせぬ僕等につき廻つて、賴みもせぬ案内して呉れたも、矢張定石を打つて居たのかと可笑しかつた、都も遠き山里の吉野の山の堂守迄、甘ま〳〵關東のヘケタレと、上方のゼイ六を欺める世の中とはなつた。

吉野山峯の白雪何とやらして、

賤のおだ卷繰り返へし昔を今になすよしもがな。

シベリヤの一番鎗

兎角して僕は大使館の室内裝飾を取付ける爲め、再び巴里へ出張を命ぜられ、同時に濱田君は英米先進國の百貨店の組織を研究する爲めに、又益さんは何か珍らしい商品を仕入れて來る爲めに三人同行、戰後漸く開けた計りの、シベリヤ鐵道によつて歐洲に入る事になつた、來月は出發と云ふので三人それ〳〵準備やら、故郷に兩親を訪ふて暇乞ひやら、友人達が集まつて送別會を催ふして呉れるやら、兎角出發前はわけもなく忙がしい、聊か迷惑でも出席しなければならぬ會もある、義理といふ奴位ひ始末に負へぬ代物はないと思ふ事がある。

此四五日濱田君の姿が見えぬ、聞いて見ると近頃神經衰弱で屁古垂れて居る、此分では一緒に行けまいとある、ホームシツクにしては餘り早過ぎる樣だが?……、まゝよそれなら益さんと二人連れで出掛けるか、何せよ此前の便で益田氏の一行が、戰後始めて皮切りにシベリヤを通過したばかり、僕等は第二番目ではあるが、戰敗國の敵愾心が、どの程度にあるかサツパリ樣子が知れず、露西亞語と來たら自慢ぢやないが只の一語も知らない、

第一ステーションの名が讀めない、その心細い事は一と通りでない。

愈々今日は出發となる、系累のない僕は誠に呑氣なもので、兩手に提げられる範圍の手荷物を用意して、其外の所有物は悉く金十圓を投じて夜店で購ひ得た、それでも總桐の箱笥に詰め込み、錠を下して伯母の家に預け、妹と伯母に送られ飄然として新橋ステーションに出掛けた、大分友人や知人が見送りに來てくれて居る、荷物を積み込んで發車迄を雜談に過して、益さんの來るのを待てど暮せど姿を見せぬ、先生時間を感違ひして居るのぢやないかと氣が氣ではない。愈々時は迫つて今や發車といふ時に、群集ザワめいて驅け付けたのは正に我が益さんであつた、やれ〳〵と思ふ間もなくピーと汽車は走り初めた、閉口するのは餞別とあつて、果物の大きな籠などを汽車へ持ち込まれる事である、貰つて不平を云ふのは甚だ不當であるが然し實際困る、知らぬ人にはやる事も出來ず、捨て去るも如何、況んや之を最後迄持ち廻つて旅行するに於てをや、況んや之に對して一々禮狀を發し、歸朝の節は何か御返し物の心配までせざるべからざるに於てをや、思つた丈けでも

うんざりする、なぜこう世間は人を困らす樣に出來て居るのかしら、先づ取散らした手荷物や、餞別として貰つた物を整理してホッと一と息すると、ヤッーしまつた！、旅行券を忘れた、益さん大いに屁古垂れの體、何とか宜い智惠はない物かと考へて見たが、間に合はぬといふ事に結着して、遺憾ながら益さんは一と船あとからといふ事になつた、心細くも戰後のシベリヤは僕が一番槍を承る事になつたのである。同行には獨逸商館員の宮部君、特許局の湯淺君の二氏がある。

露西亞の義勇艦隊何やら號が、今は客船となつて浦鹽と敦賀の間を、一週間に一度づゝ往復して居る、此船に乘り込んだのは、明治四十年八月十日の午後二時である、どこ迄も露西亞式に悠々と出帆したのは、夕陽既に落ちて西の空を赤々と染めなした頃である、敦賀の山河を後にして二日間の海上生活、十二日の午後五時頃漸く浦鹽港の入口を望んで船足ゆるやかに這入つて行く。ズラリ並んだ砲臺のアウトラインは、如何にも入り來る船を威壓する樣に見える。

甲板に出て物好きにも此危險なる光景を寫生し初めた、もし其筋の役人にでも見付かつたら……桑原〳〵、其夜は上陸相叶はず、翌朝船に來た稅關の役人が嚴重な荷物の檢査をして上陸を許されたのが晝頃である、荷物は浦鹽の停車場に託送して、取敢へず內地へ通信する爲めに若干の郵券を需むべく郵便局に出掛けた、見れば大勢の人をカウンターの前に待たせて、悠々と晝飯を喰つて居る、其後ろには劍付銃を持つた兵卒が護衛して居る、到底他所では見られぬ圖である、道路の泥濘と來たら、ほんとうに脛を沒する程で、ゴムの長靴やオバーシューズの優秀品が、露西亞から輸入せられるのも故あるかなと首肯かせらる。

晝飯の時一軒の料理屋に這入り、手眞似や英語交りで注文をすると、やがて出て來たビフテキの大きい事と云つたらお話しにならぬ、酸漬けの胡瓜などは七八寸位の太とい奴が、丸ごと四五本盛られてある、うつかり內地の積りで四五品も注文したら始末に負へない、何を見ても一ト調子變つて居る。

インターナショナル スリーピング カーの會社に乘車券を引換へに行く、二三時間も手間どつて痺れを切らし、漸く自分に御鉢が廻つて來た、幸ひと相手が佛人で英語も解かり、割合無難に用が便じて、十三日の夕方漸く列車に乘り込む。精々廿哩位な速力でノロ〳〵動き出した、汽車の中では多少英語が通じるであらうと樂しんで居た、處が更らに一語も通用せず、是にはホト〳〵閉口した、幸ひ宮部君の獨逸語で、僅かに每日の用を便するが其不便なる事夥だしい、二等の寢臺は一室四人詰で、外に廊下がありかなり廣く出來て居る、洗面所と便所は共同で、各車の前後兩端に附屬し、一等には寢室每に付いてゐる、同行三人が日本人、今一人はルーマニヤ人で、寢ても起きても同室の御蔭で、顏は互に見合せて居るが一語も通ぜず、只互にニヤ〳〵して居る計り、明けても暮れても此唐變木を眺めて、モスコー迄十一日間も打ツ通すかと思ふとうんざりする、窓外は只坦々たる平原、山らしい山が有るではなし、水の流れがあるではなし、氣のきいた森林があるでもない、神樣が餘程退窟した時に造つた土地と見える。

嚴寒骨も凍ると聞くシベリヤの原も、今や小春日和の八月中旬で、野菊や女郎花などが處きらはぬ花盛り、遠山霞み夕燒けの空を望んでラクダの群が五疋又六疋、稀には綿を千切つて投げた樣な羊の群も見える……とでも云つて置けば、稍々趣きも有る。

此荒凉たる廣野原に、何人の墓標か、寂しく一本の十字架が道端に傾いて立つてゐる、如何なる運命の人のなれの果ぞ?、ハテ一首手向けて遣そうず——

汝が墓は五千哩の廣野原
安らかに眠れよ花ぞ咲きつる

災難

十九日の明け方であつた、未だベッドの中でウツラ〳〵やつてゐる時、突然ドスン!と烈しいショックが有つて、上寢臺(アッパーベッド)からはぢき飛ばされた、驚いて寢間着のまゝ窓外を見れば眞の暗黑、列車はストップして何やらガヤ〳〵前の方が騷がしい、大急ぎで寢間着を着

換へて扉の外を窺へば、是は暗い筈、正にトンネルの中である、何やら樣子が可笑しいので外に出て見る、汽罐車はトンネルの出口に於て、何物かに衝突脱線して、將にバイカル湖に滑り込まんとして、危く踏み止めてゐる、削りなしたる斷崖は十數尺、脚下に迫るバイカルの湖は藍を流したるが如く、渺々として遙かに水天相連なつて果てしも見えない。

今少しで露スキーの龍宮にお詣りする處であつた、聞けば傍らの山から、岩石の大塊(かい)が線路の上に崩れ落ちて、ガン!と衝突したのである、ヤレ〳〵危ない事であつた、今頃岩なぞ崩れ落ちないでも、一層日露戰爭中に今少し景氣よく、此トンネルを埋めて通行を遮斷するか、列車などは遠慮なくボコ〳〵バイカル湖に飛び込めば宜いのに……。

乘組員ばかりでは脫線の機關車はどうにもならない、電線に軍用電話を引掛けて、頻りにイルクツクの驛と交渉してゐる、乘客は呑氣に湖畔を散歩して花なぞ摘んでゐる、永い汽車の旅にあき〳〵してゐた折柄とて誠に愉快な保養であつた、四五時間も閑をつぶしてゐる間にイルクツクから迎への汽車が來た、乘客は悉く手荷物を積み換へて新らしく掃除せ

られた心地よき車に乘り換へ、イルクツク指して走り出す、負傷さへなけりや見物には面白い事故である。

此頃食堂で喰はせるシベリヤ產の痩鷄はコチ〳〵と固い計りで、油氣はなし閉口してゐたが、果せるかな腹の工合を惡るくした、廿一日頃からシク〳〵痛み出す、下痢を催ふす、便所へ通ふ回數が段々烈しくなつて、遂に血便が出る樣になつた、愈々是は赤痢かと自覺した時は、全身水を浴びた樣なショックを感じ、或は之が爲めに、年貢を納める樣な運命になるのではあるまいかと深く恐れた、今は大任を負ふて巴里に赴く途中に於て、倒れる事は如何にも殘念至極であ、る玆はシベリヤの大平原で、モスコー迄は未だ三日路を餘す、危險なる傳染病と知れて、此シベリヤに下車を命ぜられたら迚も助からない、せめてモスコー迄行けば、領事もゐるであらうし、相當な病院も有らう、是が非でもそれ迄はと、內心一パイに緊張して來た、ヨシ！三日や四日は、喰はんでも死にはせぬ、惡い物はドシ〳〵排泄して喰はずにをれば、負擔は輕く自然に恢復せぬとも限らぬ。

用意の下劑を飲んで盛んに便所に通ふ、同行の宮部君が心配して呉れて、乘客中に醫師は居らぬかと尋ねてくれ、やがて一人の露スキーの醫師と云ふのが見舞に來てくれたが、言語が通ぜぬ爲めに更らに要領を得ない、宮部君が僕の日本語を、獨逸語に譯してボーイに傳へる、ボーイが之を露語に譯して醫師に話す、醫師の質問をボーイが、怪し氣な獨逸語に譯して宮部君に話す、宮部君が日本語で僕に取次ぐ、いや早手數の掛つた會話である、僕から醫師の耳に到達する迄には、飛んでもない事になつてゐるかも知れない、便りない事夥だしい、それでも結局食堂に備へて有つた、露國製の下劑を呉れて、廿四粒の源氏豆大の油藥を一度に飲めと云ふ、偖て飲んで宜いやら惡いやら、念を押して見るすべもない。

兎角して腹は益々絞らるゝ樣に痛みを感じ、安靜にしてゐたくも列車は不斷に動搖して寸時も安靜を許さない、今ウラル山にかゝつたと誰やらが云ふので、今生の忍ひ出にどんな山だか見て置かうと、窓際に這ひ出して窓外を見る、狗鼠！何の變哲もない、極めて平凡な景色である、何の事だと失望して再びベッドに横臥して、一寸試しの苦痛を味ふ、ナ

ポレオンでも病には勝てぬかと情けなくなる。

一日千秋の思ひ、三日間に三千秋の思ひで待ちに待つたモスコーに到着し、馬車をメトロポールホテルに走らせる、嬉しや此處では英語が通じる、クラークに日本領事の事を聞いて見た、すると豈計らんや名譽領事殿は日本人にはあらずして、露スキーだといふ、再び失望のドン底に突き落されて、早速ベッドに潜り込み糞壺を抱へて一夜轉々呻吟する、何としても眠りに落ちない、夜は深々と更けて徒らに隣室の鼾聲を羨み苦悶懊惱する計りである。

嗚呼！行かんと欲して前途は尙遼遠に、歸らんと欲すれば道更らに遠し、重任を負ふて進退兩難に陷る……、エーまゝよ一歩でも目的地に前進して死ぬ方が男らしくて宜いちやないか。

愈々決心してその翌晩ステーツカーに乘つて伯林に向ふ、インターナショナルの寢臺車と違つて非常に設備が惡るい、ベッドなどは固い棚の上へ毛布二枚二ルーブルで借りて、昆布卷きの樣になつて横はる、手洗ひの水などは濁つて居て薄氣味惡く、萬事雜然として

不潔なる到底文明國としては請取りにくい。

兎角して露獨の國境、アレキサンドローヴォーに着いたのは、廿七日午前二時頃である、下痢に痩せてヘト〳〵になつた腹を抱へて、手荷物の檢査やら汽車の乘換へやら、ホット自分のシートに落付いて見ると、何時の間にやら帽子と洋傘を盜まれて居る、之が狡落しなら安いものだが、そうは問屋が卸すまい。

國境を越えて獨逸に這入つてから、一切の設備が悉く違ふ、汽車の中でも萬事キチンとして手洗場のタオルは小さいのを一枚づゝ使用し、石鹸は一度使用する丈けの大きさに造られてある、シートには洗濯したカバーが一々取換へられる、客車から食堂の隅々迄塵一つない樣に、掃除婦は恰も看護婦の樣な上着を着けて働らいて居る、裏長家から堂々たる病院に來た程の相違である、窓外を見れば畑の耕されて居る有樣迄が全然違ふ、それも其筈、世界で最も行屆かない荒削りの露西亞から、世界で一番組織立つた、凡帳面な獨逸に這入つたのである、氣分が一變すると共に、さしもに烈しい病勢も稍々落付いて、便所通

ひも少なくなつた。

午後十一時に伯林へ着いたが、若し堪へられなければ、井上大使に援助を求める積りで居た、然るに此分なら巴里迄辛棒出來るかも知れない、愚圖々々せずに一直線に勇を鼓して、巴里行の汽車に乘り換へ、翌廿八日の午前十時といふに漸く巴里へ着いた。

病勢大いに衰へたので、先づホテルキャンベルに投宿し、佐野君に逢ふて相談せんものと同君を訪ねて見ると、都合の惡るい時には仕方のないもので、同君は誰かを案内して、目下伊太利へ旅行中とある、愈々以て人の力を賴むなと云ふ天の命令である。

それならこれからは、自ら醫師となつて攝生療法を試み、倒るゝ迄も使命を果さんと決心した、由來ホテルの食事はスープとパン計り、外の食物は嚙んで味ふ丈け、粕は口から吐き出して決して嚥下せず、毎日腹を撫でゝは首を捻る、夜は腹卷を厚くし、朝は深呼吸をやる、寢られぬまゝに早く起きて、靜かに朝霧の間を運動して見る、實に忠實なる不斷の努力を續けて居る、これで治らなければ、病氣の畜生が惡いのだと獨りで極めて居る。

大使館の裝飾

大使館を訪ふて來着の挨拶を爲し、愈々仕事に着手する打合をなし、メーブルの巴里支店を訪ふて、裝飾取付の工事を依賴し、英國人と佛蘭西人の職工を使つて、自分が現場監督となり、圖面によつて工事を進行する、先づ在來の裝飾ルイ十六世式の天井や壁を取外す、どれも之も手本にしたい程、立派な裝飾をバリ〳〵打碎く、惜しい物であるが仕方がない、而もこの立派な裝飾物を取外して、自分の設計になる貧弱な日本式が、其後に顯はれた結果著しく見劣りする事はあるまいか、懸念に堪へない次第である、其中に佐野君は伊太利の旅行から歸つて來た、同君に依賴して、日本から到着する荷物を稅關から請取り人夫を督して開函する、笹棒に嚴重なケースを開いて見ると、武力の板の內側に詰められた藁が水分を含んで居た爲に、印度洋の熱に蒸發して、織物も木材部も一面に黴を生じてゐる狂はぬ樣にと態々英國から仕入れたマホガニーもオークも、皆多少の狂ひを生じてゐる、只

一圖に嚴重にとのみ注意した事が却つて仇となつた、無經驗の仕事には大方こういふ失敗がある、壁張りの緞子などは、一面の斑點を生じて、何としても此儘では用をなさぬ。

メーブルに託して星拔き色揚げ等を試みた處が流石は佛蘭西である、日本では迚も出來ない程巧みに仕上が出來て、幸にして無事なるを得た、木がふやけた爲めに、嵌入してあつた木象眼や樂燒きの楓など割れて飛び出したのがある、これは佛人の職工長が甘くつぎ合せて再び嵌入し、油繪の具や種々なる塗料を應用して巧みに補ふ、木地蠟塗の板に割れ目を生じたのはラックで甘く直す、兎に角佛蘭西の職工は、工業常識が發達して居て、大概な事は心得てゐる、日本の職人は小手先が器用だとて自慢してゐるが、仲々以て世間見ずの云ひ草であると感心せしめられた。

彫刻物破損の修繕は、稻垣君といふ彫刻研究の留學生に依賴したが、最も困難したのは婦人室の家具全部、卵の殼を張つた漆塗である、木材がダンプの爲めにふやけて、塗物の下地を犯した爲め、ボロ〳〵剝落する、菅原君といふ漆工がゐたので、同君に賴んで繕ろ

はしたが、日を經るに隨つて他の部分が又ボロ〳〵やり出す、終には到底姑息なる修繕では、彌縫する事が出來なくなつて殆んど窮した、毎日通ふ地下鐵道の中で思ひ餘つて考へながら、豫定の停車場を乘り越す事も一再ならず、そこで數日間其處置に呻吟した結果、涙を奮つて斷然之を掻き落し、メーブルに賴んで艶消しの白イナメルに塗直させた。荷函の內部に武力板を張らなかつたら、此樣な結果にはなるまいにと痛恨やる方もない。

一緒に來る筈であつた益さんは九月の四日に巴里で落合つた、其頃川上音次郎君が貞奴以下十四五人の同勢を引卒して巴里に來た、栗野大使に何かと世話になつて居た樣だが、聊か慘めなものであつた、日本內地の興業で行き詰ると、きぬきに大法螺を吹いて、一座洋行といふ洒落れた餘裕を示す內實はかなり樂ではない樣だ、ミラモンマランシーといふ町外れに一軒の空家を借り、敷物もなければ碌な家具もない家に大勢ゴロ〳〵してゐる、石炭が高いからストーブも碌に焚けない。

僕が大使館の裏庭で日本から來た家具の荷箱を開かせてゐると、オヅ〳〵傍に來た川上

君、其空箱を安く頂きたいものですが如何でしやう？、欲しければ差上げるが運賃は君の方で拂ひ給へと、車力に命じて川上君の借家に屆けしめた、其後是非一度遊びに來いといふので、ある日曜日の午後に訪問して見た、すると前日屆けさせた荷物の空箱が前のヤードに山の樣に積んである、聞いて見れば一寸も厚味のある杉板を五寸釘で打付けてある、其上に殿重な帶金が四方に廻つてゐるので、痩せ腕の馬の足には到底毀す事が出來ぬから、中の詰め物や蓋は焚いたが函の胴殼は始末に負へぬと、流石の川上君半泣きの體、可笑くもあり氣の毒でもある、未だ澤山荷が到着する筈であるから、宜しければいくらでも送りますよ、いやどう致して運賃に二十法も取られて此始末で、後の處は眞平々々、失笑一番せざるを得なかつた。

大使館の宴會に餘興をしたり、僅かに場末の何とかアルチストといふ寄席に紅葉狩りの一と幕を出したり、それも只毛色の變つた取合せの一つで、決して呼び物には成つて居らぬ、客種も中流以下のしかも勞働者が多い、貞奴の鬼女が名題下の大根を相手に御目まだ

るい立廻りで、恐らく芝居の筋さへ解る見物は一人もあるまい、我々が支那劇を一と幕見せられた位ひなものであらう、到底一座の巴里生活費を賄ふ程の收入が有りそうでない、日本に歸るとグランドオペラで大芝居を打つた樣な評判を取る、其上巴里土產とやら、洋行歸りの新研究などと稱する翻譯芝居を出して、全國を打ち廻り相當大向ふに受けたものだ、世間は廣い。

僕の仕事も日を重ねて大方にはなつたが、未だ數物が揃はぬ、視察兼催促旁々ロンドンを去る百三十哩ばかりのキヅデヤミンスターにブリントン會社を見に行く、キヅデヤミンスターの町は、ブリントン氏の經營する絨氈製造會社の爲めに出來て居る、一村の住民は擧げて此會社に就職し、子弟は小學校から工業學校に入り、卒業すると皆此會社に勤めるらしい。

工場は川の流れを挾んで建てられ、此水を利用して染色に蒸氣に水洗に利用してゐる、豫て送附してあるデザインによつて、今製作しつゝある大使館のカーペットは、此會社

でも初めて製作する立派なもので、五種類悉く模様と寸法が異つてゐるので一切手製である、其出來上つた厚さは一吋もあるので、其上を歩くと雪の上でも踏む樣に、ギュッ〳〵と靴が埋まる、大使館を訪問する人が、先づ驚くのは此絨氈であつた、ブリントン氏の案内で意匠設計部から染色部、製糸部、製織部、仕上部、毛織部、荷造發送部、悉く場内を一覽して、其規模の廣大なるに感心した、羊毛は濠洲から、麻は露西亞から、染料は獨逸から、然して出來上つた製品は、英國内地は勿論、米國其他世界各國へ輸出せられる、最も感心したのはアックスミンスターと稱する、絨氈を織る機械の構造組織の巧妙なる點であつた、由來幾多の機織機械を見たが、是程巧妙に働く模樣織機を見た事がない、絨氈の模樣に使用せらるゝ十數種の色糸が、織前の上部に各種並列してゐて、ジヤカード機の紋紙が廻轉する毎に、必要なる色糸が各種取交ぜてオートマチツクに一列に並ぶ組織で、此一列に並んだ色糸を其數丈け揃つてゐるピンセット樣の爪で一本づゝ巧みに挾んで四分の三吋程引出すと、小刀がスル〳〵ツと之を切放す、同時にピンセットは糸を挾んだまゝ、ガチ

ヤリと織前に運んで來て、織込まれたる緯糸と組織せられ、見る〳〵中に立派な模樣となつて現はれる、廉價にして美事なる絨氈は、此機械によつて短時間に多量に製産せられるのである。

翌四十一年一月末には、さしも苦しめられた僕の仕事も、型がついて無事に引渡しを了した、大使館では新裝落成とあつて、朝野の名士貴婦人を招待し、連日客を迎へて居るが、幸にして此眼新らしい、新興國日本式の室内裝飾が好評で、最初の見込通り同じ金を掛けるなら、自國の趣味を取り入れて裝飾するが宜いといふ事になつた、痩せ馬が重荷を負ふてアルプスの嶮を攀ぢ登り、流汗淋漓山亦山を越えて、漸く伊太利の町に這入つた樣な心持ちに成つた、あゝ之で氣も心も輕くなつた。

半歳餘り悪戰苦闘した花の都の巴里を後に住み馴れたロンドンに歸り、再びバンクサイドの人となる。

常陸山

二月十日には米國から常陸山が、通譯の書生を一人從へてやつて來て、物産會社の世話で同宿する、迷惑ながら頼まれて僕が市中を案内する、四尺九寸五分の痩軀が、六尺豐かなる大兵肥滿の常陸山と連れ立つて歩るく、誠に以て結構な釣合つた對照である、何か人立ちがしてゐるから僕が覗いて見る、後に立つた常陸山が大きな聲で、

君何か見えるかね？

いや西洋人の尻許り見える、

ワツハツ〳〵〳〵ハアー、

不遠慮な大きな笑ひ聲だ、群集が振り向いて怪げんな顔付きで見る、餘り大きな聲で笑ふと、チョンマゲの上に載せた山高帽子が落ちそうになる。

今ロンドンには小村侯爵が大使として駐在して居られる、常陸山が來たと聞いて、一夕大使館の晩餐に招いた、僕にも序に來いとある、ハンサムをブロンヅベリーから驅つて、右の方には三十七貫左には十貫餘りの僕が乘つて出かけた、久しぶりに日本酒やら刺身の

御馳走になつて宜い心持ちになつて居る、伊集院氏や松平書記官栃内大佐などが同席してゐた、大使は常陸山に向つて、

お前は今度代議士の候補に立つといふぢやないか、

ハイ國の者が頻りに勸めますので、

ウム、それは止せ〳〵、お前は相撲取つては天下の横綱ぢやが、代議士では陣笠ぢや、一横綱が陣笠になつてもつまらんから止せ！お前が代議士になつた處で別に國家の爲めにも成りやせん、餘計な事せんで置け……、

倭少五尺に足らぬ小村大使が、六尺豐かの巨人を小供の樣にこなし付ける、常陸山大きな體して額の汗を拭きながら、その見識に威壓せられてグーの音も出ない。

ハアー！エー止しましやう、

ウム止せ々々つまらん事ぢや！

それから大分杯を重ねてそろ〳〵へゞル頃、御暇して再びハンサムの人となる、やがて

コクリ〳〵とやり出したが雷の如き鼾聲と變つて、バンクサイドへ着いた頃には前後不覺となつた、僕は外に出てキャップマンに金を拂ひ、巨人を呼べとゆすれど出やうともせぬ、狹まいキヤブの中で三十七貫が、踏反りかへつて何とも仕樣がない、其中にどうしたはずみか小間物屋を開店する、山高帽子が其上を泳いで、チョン髷が現はれる、キヤップマンはブー〳〵怒る實に閉口した、幸ひ外は眞暗で誰れも知る者はないが、此三十七貫の醉ひどれ何と仕樣もない、早速常陸山の書生とコックの淺岡を呼び出して應援を求め、やう〻〻二階の寢室に連れ込んだがこんな困つた事はない、常陸山の案内も大概にして御免蒙る、其中に彼はロンドンを去つて巴里へ出掛ける。

研究

僕は南ケンシントンのアルバート博物館に、建築裝飾の歴史的參考品を見學し、毎日寫生帖を抱へて之に通ひ、果ては圖板其他の道具を同館に預けて通ふ、英國其他歐洲の博物

館では許可證を事務所から貰へば、美術家や學生の爲めに特別な便宜を與へて呉れる、高い處へ乘るに脚立も貸してくれる、參觀人が寫生の邪魔になれば、假のかこいも置いてくれる、時には看視人が手を貸してくれる、誠に親切なるサービスが行はれてゐる、日本などはいつ此樣な眞似が出來る樣になるか、羨ましい限りである。

三月廿七日には濱田君がルスタニヤ號で米國を廻つて來た、一緒に來る筈の三人が一人〳〵別々に、然も各違つた道を取つて、今日八ケ月目に計らずロンドンで落合ふ、世の中の事は豫定の通りには行かぬものである。

四月一日本店から電報が來た、開いて見れば開店大成功とある、木造西館の新築が落成して開店したのである、歐米の百貨店に比べては、貧弱極まるものであるが、東京では未だ珍らしい、押すな〳〵の盛況眼のあたり見る樣である、濱田君は毎日ロンドン一流の百貨店ハローズに通つてオルガニゼーションの研究に專念して居る、ある日先生嘆じて曰く、僕が質問の要點を書きつらねて提出すると、先方には悉く了解して明快な回答を與へてく

れる、只恨むらくは向ふの云ふ事が解らない、そこで僕が質問すると、僕の云ふ事が向ふに少しも解らない。

僕一笑して曰く、それは實に當然である、僕には東北辯の君の日本語が、三分の二位しか解らんのであるから、君の英語が英國人に解からんのに不思議はあるまい。

チユーリストパーテー

四月十一日からクツク社のチユーリストパーテーに這入つて、伊太利旅行に出掛けた、午前十時にビクトリヤステーションに手荷物一個を提げて行くと、既に僕と同じメンバーが十四五人集まつてゐる、コングクターのシュリオ君が一人々々會員に紹介してくれる、スコツチの赤鼻夫妻、アイリツシの蛙夫婦に家鴨夫人、醫師ジュラフ、番頭のテテベヤ君、河馬君、女店員のチョコレート嬢、オチヤツビー嬢、チュウインガム嬢、老嬢の七面鳥嬢、オーストリツチ女史、カンガルー夫人など、それ〳〵挨拶して一行に加はる、シュリオ君

はユダヤ人で、英語は勿論佛語も伊太利語も話す、クツク社のクラークで一行の荷物を纏めて赤帽に託して、それ〳〵客車に積み込み馬車の世話からホテルの掛合ひ、晝飯の支度と、行く先き〳〵の案内迄一切萬事一人で引受けて世話をする。

パーテイのメンバーは、シュリオ君から時間其他のプログラムを聞いて、打合せの時間に打合せの場所に集まりさへすれば何の苦勞もなく目的の都市を旅行して、名所舊跡の案内説明等をして呉れる、こんな呑氣な氣苦勞のない旅をしたことはない、金さへあれば西洋は住みよい處である。

ロンドンを後にしてニューヘブンに下車し、連絡汽船で對岸に渡り、佛蘭西の汽車で再度巴里に入り、一泊して翌日巴里を捨てゝ一路伊太利に向ふ、一行中の嫌はれ者は何と言つても老嬢のターキー女史である、芳紀正に五十六七歳、痩せこけた皺苦茶な顔に、白粉をコテ〳〵と叩きつけ、いやに品をつくつて異性に親しみたがる、何か可笑しいことがあると、齒糞だらけな黄色いやつをむき出してキヤツ〳〵と笑ふ、金壺眼が底の方で青

い光を放つ時、霜枯れの野末に飢饉年の神が笑つてゐる樣な、一種小氣味の惡るい感に打たれた、性の香に飢ゑた流石のテテベヤもヒッポも、恐れをなして近寄る者がない、何か話しかけても一向取合はないで逃げてしまふ、案内者のシュリオ君も、汽車のシートや馬車の乘組みを極める時に一と苦勞である、誰れも彼れもターキー孃の隣りへ座を占めることを喜ばない、止むを得ず後家さんや夫婦者を割當てるが皆顔を顰める、結局餘り言語の自由でない僕が宜からうとあつて、密かにシュリオ君が賴みに來た、そこで此天下の雜物の隣り座席は僕が占むるの光榮を有するに至つた、ターキー孃は話相手がなくて、寂しくてたまらないから頻りに何か話かける、僕と雖も又此ターキー孃の若き燕となるのは感心しない、何を云ふか一向解らんふりをして取合はず、鉛筆を畫帖に走らせて頻りに窓外の景色を寫生する、一軒置いて隣りのダック夫人が僕に向つて奇問を發する。

日本の樹木は皆小さくつて高さが一呎六吋位より以上の木は無いのかといふ、

いや日本の家屋は木造が多い、皆此コッテージは日本に產する木材を使用するのだ、何

故又其樣な奇問を發するのかと聞いて見ると曰く、過日日本の樹木の展覽會を見ると、高さ一尺位で五十年も六十年も經つた木が、皆植木鉢に植られて、それは〳〵實に美術的な木ばかりであつたと云ふ、盆栽の陳列會を見て日本の樹木は皆小さいと思つてゐる。

一行の列車はトリノ市に着いた、僕は小さい手提鞄を持つてサッサと下りる、後ろからアイセイ！と聲をかける者がある、誰かと思へばターキー孃だ、此帽子の函と其ラッグと鞄を下ろして外套と傘を持つて下さい、紳士は當然レディをヘルプするものだと云つた樣な態度である、餘り西洋の禮に倣つたことのない僕は、面喰ふと同時に少なからず不平を感じた、未だ夫れ程懇意ではなし、碌々親しく話をしたこともない、況んや相手は女でこそあれレディと云ふ柄ではない、況んや僕をサーバントの如く心得て、命令的な態度をするに於てをや、小憎らしなんと云ふ計りない。

餘程怒鳴り付けてやらうかと思つたが、未だ二三週間も一緒に旅行しなければならぬに、それでは穩やかでないと思ひ返して、云ふがまゝに手傳つて降してやつた、未だ何か諄々

云つて居る樣だが、面倒臭いから解からぬふりしてサツサと馬車に乘る、馬車がホテルに着くと又手を引いて呉れの、荷物を運んで呉れのと小五月蠅い、僕はお前のサーバントぢやないから、御免蒙むるよとキツパリ云ひ放つ、老孃眼をクリ〳〵させ七面鳥の樣に顏色を換へて、口の内で何かブツ〳〵小言を云つてゐる、チヨコレート、チユーインガム、オチャツピーなどの諸孃は、向ふをむいてクスリ〳〵、先達のシュリオ君は氣を利かして大きな聲で、カム ジス ウエイ オールー

其夜食事を濟まして三々伍々喫煙室に集まる、ターキー孃は誰れも話相手にならぬ、寂しく獨りで不平そうに寢室へ、僕はソファーに腰を埋めて天井のオーナメントを見入つてゐると、惡戯者のテテベヤ君が僕の傍らに腰を下して、僕のポケットから半分出かかつて居た寫生帖を引出して見てゐたが、やがてスコツチのレツドノース夫人の處へ持つて行く、夫人は見てクス〳〵笑ひながら、亭主にそれを見せる、レツドノース君は不平滿々たる顏をして、僕の處へ其寫生帖を突きつけて曰く、

拙者の鼻はこんなに赤くはないし、第一此格好が宜しくないと抗議を持ち込む、

僕が内密に寫生した漫畫がバレたのである、仕方がないから此畫が實物に似て居るか居ないか、多數で決する事にしやう、

レデース エンド ジエントルメン！此スケツチはレツドノース君に似て居るか居ないか、もし似て居ると思ふ人は起立をして呉れ給へ！

フレーイ、と拍手が起る、誰れも彼れも皆起立する、

ハツハー、多數と認めます……で大笑ひ。

世界三大難工事の一つと云はれるアルプス越えの鐵道は、大小五十餘ケ所のトンネルをくゞり、或は一つの峯を望んで、グル〳〵三度もお鉢を廻りながら段々高處に進んで、俄かの吹雪に襲はれるかと思ふと、山のふもとには花が咲いてゐる、マーブルの出るカラニ山を左に見たり、ナポレオンの流されたエルバ島を、右手の海の彼方に眺めたり、極めて變化に富んだ興味ある道を走つて羅馬に入る。

羅馬に來て眼を驚かすものは、サンピエトロの寺院である、ベルニニが十年を費して建築したもので、二百八十四本の巨柱を以て楕圓形の廻廊を作り、中央の廣場には埃及から船で運んだといふ赤花崗岩の、百三十呎といふオベリスクが屹立してゐる、本堂の奥行は百九十八呎で、十字架に象つた伊太利式巨樓の上に、大きなドームを頂いてゐる、寺院としての壯麗なること世界第一と誇る大伽藍である、此處は使徒ピエトロが、教義に殉じて磔刑に處せられた處である。

ヴアチカン宮殿は羅馬法王の御座所で、華麗眼を驚かすものがある、西曆千四百五十年時の法王ニコラス五世が、世界宮殿中最も壯麗なるものにしやうと志し、亦後世の法王が累代其志をついで、遂に世界建築界に覇者たるの觀を呈するに至つた。

取分け藏する所の古美術品は又廣大なもので、之なくんば羅馬は非常なる寂寥を感ずであらうと云はれてゐる、古代希臘の名彫刻よりミケランゼロやラフアイエル等の名作品擧げて數ふるに遑ない、殊に古文書も非常に數多き中に最も珍とすべきは、伊達政宗が羅馬

法王に寄せたる日本文と、拉典文の兩樣に認めた書翰があるといふ事である。

最も奇異に感じたのは、カプシン宗の墓地である、修道院の中庭に隣接して四個の土室があり、壁と云はず天井と云はず、悉く髑髏と木乃伊を以て飾つてある、骨片を以て天井の裝飾を施し、其模樣がルネツサンス式に見ゆるも可笑しい。此土室はエルサレムから態々運んだ聖土を以て造られ、カプシン宗の僧侶が死ぬと此處に埋葬するのが例であるといふ、髑髏もこう賑やかに飾り立てると甚だ凄味に乏しい、どうやら博覽會の出品に、コーンの輪切や落花生や豆などを以て裝飾した農業館でも見る樣で聊か滑稽な感じがする、ちと物眞似が過ぎはせぬか。

昔暴君ネロの迫害を恐れて、難を避け土中深く十字形に穴を穿つて、其處に悲慘なる信仰生活を送つたといふ墓窖（カタコンブ）がある、穴道の兩側には、朽ち果てた骨片の遺留せるものが諸所に散在し、穴壁滑らかに苔むして、千古の鬼氣人に迫る、見物人は各一本のキャンデルに點火して足許に注意しながら、御苦勞樣にも此穴を探見するのであるが、寧ろ此方が遙

かに眞面目で凄味がある。

紀元前四世紀頃羅馬の盛時に、今を時めく貴人や花の粧ひ美しき淑女達が、輕車を連らねたり、凱旋の英雄が戰車に捕虜を繫いで、行進したと云ふアッピヤ街は、僅かにサンセバスチーの城門や、城壁の跡に昔の俤を殘して只青草の野原となつてゐるが、堅牢にして坦々たる道路は昔のまゝに存して、一と雨降れば沼となる樣な、今出來の一等國の都大路などとは比較すべくもない。

千百餘年に亘つて神靈の火焰を絶やさなかつたといふウエスタの聖祠や、羅馬公議所（フォーラム）の廢墟パラチーノ丘や、サンアンゼルの古城、大演武場、カラ〳〵浴場の廢址、タイタス王の凱旋門など有名なる古跡ではラツセル博士が立つて盛んに講演をしてくれる、せめて半分も解かればと殘念に思つた。

それからナポリ、ポンペイ、ベスビヤス、ミラン、フロレンス、ベニスなどを見物してロンドンに歸り、再びメーブル會社の人となつて前年來の研究を續け、夜は中央美術學校

に通つて、滯在更らに一年餘り。

本店から來合せたT君と共に、材料の仕入やら參考品を買集めて、同君と共に佛、獨、墺、白、和等の諸國を一週し、僕はシベリヤを經て共に歸朝し、T君は米國を廻り、家具の工場を起すやら、室内裝飾部を創設するやら、紛々たる俗事の記すべきものは尙殘れど……。

これ迄書いて來たら、氣管支加答兒は全快して、明日からは亦紛々擾々たる俗務に沒頭せねばならぬ事になつた。

元來筆不性な僕は、此先きを書き續ける事を斷念した、亦閉籠つて樂寢を續ける樣な病氣に取つかれたら、再び筆を執ることにしやう。

予を繞る人々　（終り）

昭和五年七月二十五日　印刷
昭和五年七月二十九日　發行

（予を繞る人々奥附）

定價　壹　圓

著者　林　幸　平

發行者　東京市日本橋區本石町三丁目十九番地　小松徹三

印刷者　東京　大森　馬込　一〇一四番地　大戸松橋

印刷所　東京　大森　馬込　一〇一四番地　石英社

版權所有

發行所　東京市日本橋區本石町三丁目十九番地
百貨店時代社
電話日本橋三〇八七番

終